

報 告

看護学科における初年次教育・二年次教育の成果と課題

前田 由紀子*	唐崎 愛子**	石田 佳奈子***	浅野 嘉延****
布花原 明子**	小野 正子**	石井 美紀代**	高橋 甲枝*
鹿毛 美香***	鹿嶋 聡子***	目野 郁子****	伊藤 直子****

<要 旨>

本研究の目的は、看護学科における初年次・二年次教育としての「基礎学習演習ゼミ」の取り組みの概要と学びのコンセプトを提示し、その成果と今後の課題を明らかにすることである。

学生の自己評価から学習スキルとして、「インターネット」や「パソコン操作」に関する技術系項目の自己評価は比較的高いが、「論理的構成力」、「批判的思考力」など論理的な技能項目の評価は低かった。受講による知識・技能獲得の自己評価では「共感性」、「協調性」の項目は高いが、「リーダーシップ」、「愛校精神」の項目は低いという結果であった。2年間のプログラムについて、大学生活における学習スキルの向上と人間関係の構築に役に立ったという意見の半面、専門科目の課題が重なり負担になったという意見が聞かれた。

今後の課題としてアドバイザー制度を基本においている長所を生かしつつ、基礎ゼミと専門教育科目との連動を考えた授業計画の検討が求められる。

キーワード：初年次教育、学習スキル、アドバイザー制度、看護系大学

I. はじめに

近年、同年代の半数以上が大学に進学するというユニバーサル化段階になり、大学に入学してくる学生の「多様化」が進んでいる。多様化とは、学習習慣の多様化、学習意欲（動機）の多様化、学習目的の多様化、学力の多様化であり、大学は様々な学生を受け入れなければならない<sup>1)</sup>。また、グローバル化が進行する中で日本の学位が国際的に通用し、国際競争力を持つことができるのかという「質保証」の問題も大学教育における大きな課題となっている。

このような中、大学分科会制度・教育部会が発表した「学士課程教育の構築に向けて」<sup>2)</sup> (2008年12月)では、大学で身につけるべき学習成果の明確化を求め、アウトカムとして「学士力」を提言した。学士力は、(1)知識・理解（多文化・異文化に関する知識の理解／人類の文化、社会と自然に関する知識の理解）(2)汎用的技能（コミュニケーション・スキル／数量的スキル／情報リテラシー／論理的思考力／問題解決力）(3)態度・志向性（自己管理能力／チームワーク、リーダー

シップ／倫理観／市民としての社会的責任／生涯学習力）(4)総合的な学習経験と総合的思考力の4つの能力からなり、大学生が卒業時まで獲得することが期待される知識や能力であると提言されている。

答申では「改革の方策」として、大学は「学習の動機付けや習慣形成に向けて、初年次教育の導入・充実を図り、学士課程全体の中で適切に位置づける」、「その際、大学生活への適応、当該大学への適応（自分の居場所づくり、自校の歴史の学習等）、大学で必要な学習方法・技術の会得、自己分析、ライフプラン・キャリアプランづくりの導入などの要素を体系化する（例：「フレッシュマンゼミ」、「基礎ゼミ」など）。また、きめ細かな学習アセスメントを実施し、学生の現状や変化の客観的な把握に努める」（審議のまとめp.36）と提言し学士課程教育における初年次教育の位置づけを明確にしている。

一方、看護教育では、大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会の報告<sup>3)</sup>において、「今後、すべての看護師等には、主体的に考え行動することができ、保健、医療、福祉等のあらゆる場において看護

\* 西南女学院大学保健福祉学部看護学科 講師  
\*\* 西南女学院大学保健福祉学部看護学科 准教授

\*\*\* 西南女学院大学保健福祉学部看護学科 助教  
\*\*\*\* 西南女学院大学保健福祉学部看護学科 教授

ケアを提供できる能力を、生涯を通じて獲得していくことが求められている。また、患者・家族にとって最適な医療を効果的に提供するため、チーム医療の調整役として、これまで以上に高度なコミュニケーション能力も要請されている」と提言された。

以上、学士課程教育に求められている学士力と看護系大学に求められる人材育成を踏まえ初年次教育を考える必要がある。初年次教育は高校から大学への移行を支援するために意図された教育であるので、大学の学習に適応するためのレポートやプレゼンテーションなどのスタディ・スキル系は欠かせない。また、看護系大学のカリキュラムの特徴として教養教育の基盤の上に専門教育が積み重なっているため、専門への導入として初年次教育を位置づけることも必要であろう。つまり、大学環境への適応と看護専門職へのキャリア形成支援を組み合わせた初年次教育のプログラムが求められる。

本看護学科では、アドバイザー制度を活用し学生の学習支援、生活支援を行っていたが、2006年度より初年次教育として基礎学習演習ゼミ（以下基礎ゼミ）をカリキュラムの中に取り入れた。アドバイザー制度を基盤に授業を展開していたが、よりきめ細やかで充実したプログラムを実施するため2009年度より初年次・二年次教育を開始した。初年次教育は、2000年代に入って多くの大学が導入を始めており、研究報告<sup>4)</sup> -<sup>7)</sup>も増加しつつある。看護系大学においても普及は進んでいると思われるが実際の研究報告<sup>8)</sup> -<sup>10)</sup>は少なく、議論は進んでいない。看護系大学における二年次教育の報告<sup>11)</sup> <sup>12)</sup>はあるが二年次教育の一部分であり、1.2年を通した初年次・二年次教育の成果に関する報告はみられない。今回、看護系大学生を対象に初年次・二年次教育を実施したので、その概要と成果および今後の課題についての検討を報告する。

## II. 方法

### 1. 対象と方法

対象者は、基礎ゼミⅠ・Ⅱを受講した本看護学科2年生92名である。分析の対象は、自己評価表の記録である。最終授業時にゼミグループにおいて2年間の基礎ゼミの授業内容を振り返りディスカッションを行い、その後に自己評価表を配布した。自己評価の内容は、大学への適応に関すること、スタディ・スキルの獲得、リメディアル教育、接遇、受講による知識・技

能の獲得に関することで授業の有益性や獲得状況について4段階評定と基礎ゼミに対する自由記述で構成した。自己評価の項目については、記述統計量を算出した。

### 2. 倫理的配慮

学生には授業開始時に文書および口頭にて、研究の目的、方法、成績評価には一切関与しないこと、個人情報保護、研究協力の任意性、研究結果の公表について説明し、同意を得た。なお、本研究は西南女学院大学の倫理審査委員会の承認を得ている。

### 3. 本看護学科における「基礎ゼミ」のコンセプト

本看護学科はキリスト教精神を基盤においた私立女子大学である。看護職に就くという学習への目的意識は高いと思われるが、ユニバーサル段階に入った大学生の特徴としてあげられる学習習慣や学力の問題は否めない。とくに新入学時の学生は、学習や資格取得に関する不安が大きい。このような学生に対し基礎ゼミⅠでは、「大学環境へのスムーズな移行」、「学習スタイルの転換」、そして看護職へキャリア形成を支援する「キャリア教育」が基本コンセプトになる。基礎ゼミⅡでは、「学習スタイルの転換」、「キャリア教育」を補完、強化していくものである。

### 4. 看護学科の初年次教育「基礎ゼミ」授業の概要

開講時期は、「基礎ゼミⅠ」は通年、1単位30時間、対象学年1年生であり、「基礎ゼミⅡ」は通年、1単位30時間、対象学年2年生である。共に必修科目になっている。担当教員は10名であり、1年生、2年生それぞれのゼミにおいて約10名の学生を担当する。基礎ゼミⅠ・Ⅱの到達目標および授業計画を表1に示す。

学生に対する教員の指導はゼミ単位が基本であるが、教員同士の横の連携は、適宜、会議を開催することで保たれていた。大学への不適応状況や学習面等、情報を共有することで学年が進行しても担当以外の学生に対する配慮ができる。

### 5. 授業の実際

#### (1) 基礎ゼミⅠ（1～5回）

新入学時は学生にとって最も心細い時期であるため、学生に孤立感をもたせないことが重要である。ここではカードメソッド<sup>13)</sup>の手法を用い、大学への早期適応のためにゼミ、同級生、上級生、教員など主に人間関係づくりを意図した。カードメソッドとはカー

表1. 基礎学習演習ゼミの授業計画

基礎ゼミⅠ（1年次）		基礎ゼミⅡ（2年次）	
<b>目標</b> 1. 大学で学ぶための基礎的な学習能力を習得することができる（読む・書く・話す・聞く・考える）。 2. 学生間の交流を通し自己理解・他者理解を深め自身の目的志向を高めることができる。また、大学での学習・生活スタイルの確立に向け、生じた問題に対し解決方法を見つけることができる。 3. 課題学習を通し、他者との関係を築きながら自ら学ぶための基礎的態度を養うことができる。 4. 信頼を得るための接遇が実践できる。		<b>目標</b> 1. 学生交流を通し自己の目的志向を明確にすることができる。また、1年次の学習の振り返りができる。 2. グループ活動、教員との面談から学習に関する問題解決を図ることができる。 3. グループ活動や他学年交流をとおり、リーダーシップ・メンバーシップの向上を図ることができる。 4. 資料作成法を習得することができる。 5. 課題学習を通して、1)論理的思考、批判的思考を身につけることができる。2)発表に向け、資料作成のための基本的スキルを身につけることができる。3)討議により、客観的ものの方やコミュニケーション力を高めることができる。	
回数	テーマ・授業内容	回数	テーマ・授業内容
オリエンテーション	新入生オリエンテーション テーマ：基礎学習演習ゼミⅠガイダンス 学習目標、学習内容を理解し、ゼミメンバーと交流する。	オリエンテーション	2年生全体オリエンテーション テーマ：基礎学習演習ゼミⅡガイダンス 学習目標、学習内容を理解し、新メンバーと交流する。
1	テーマ：大学生生活に向けての思いを表現するⅠ 大学に入学して、期待や不安などをメンバーと語り合い表現する。お互いの思いをラベルワークで表現する。	1	テーマ：課題解決学習応用Ⅰ＜テーマ決定＞ 看護の4原則（人間・環境・健康・看護）から、自らの課題を持ち寄り、グループを編成し、テーマを決定する。
2	テーマ：大学生生活に向けての思いを表現するⅡ ラベルワークを使って他のゼミメンバーに発表し、ゼミ間の交流を行う。ゼミ終了後、ラベルワークを掲示。	2	テーマ：課題解決学習応用Ⅰ＜計画発表＞ 課題解決に向けた計画立案を持ち寄り、計画を発表し、ゼミのメンバーでディスカッションをする。
3	テーマ：大学生生活の過ごし方Ⅰ＜同級生との交流＞ 仲間との交流をとおり大学生生活に向けての不安、心配を解決する方法を学ぶ。ゼミメンバー間の情報交換。	3	テーマ：交流学習-代表学生が下級生との交流を行い、大学生生活に向けてのアドバイスをする。他の学生は文献検索やデータ収集等課題学習を進める。
4	テーマ：大学生生活の過ごし方Ⅱ＜上級生との交流＞ 上級生との交流をとおり大学での学習方法を解決する方法を学ぶ。	4	テーマ：課題解決学習応用Ⅰ＜パワーポイント講義＞ パワーポイント作成法について講義を受け、プレゼンテーションをイメージする。グループ活動を続行。
5	テーマ：大学生生活の過ごし方Ⅲ＜教員と面談＞ 教員との個別面談をとおり大学での学習方法・問題を解決するための方法について学ぶ。	5	テーマ：課題解決学習応用Ⅰ＜発表準備＞ 発表資料およびパワーポイントを作製する。発表に向けた役割を決め、主体的に準備を進める。
6	テーマ：レポートの作成方法（講義） レポート作成について講義を受け、レポートの種類、書く手順、書式、また文献検索法についても学ぶ。	6	テーマ：課題解決学習応用Ⅰ＜発表＞ パワーポイントを用いた口頭発表形式における課題学習の発表を行う（前半グループ）。
7	テーマ：課題学習基礎Ⅰ（レポートの書き方） これまでの体験を通して看護への関心テーマを設定し、課題図書を読む。内容を要約し考えを整理する。	7	テーマ：課題解決学習応用Ⅰ＜発表＞ パワーポイントを用いた口頭発表形式における課題学習の発表を行う（後半グループ）。
8	テーマ：課題学習基礎Ⅱ（レポートの書き方） メンバー間で意見交換を行い、自分の考えを深める。レポート作成に向けて序論、本論、結論の構成を練る。	8	テーマ：課題解決学習応用Ⅰ＜評価・修正＞ パワーポイントを用いた口頭発表について発表ブロック毎に評価を行い、グループで修正作業をする。
9	テーマ：課題学習基礎Ⅲ（レポートの書き方） 提出したレポートの振り返りを行う。課題学習基礎のプロセスを自己評価する。	9	テーマ：課題解決学習応用Ⅰ＜個別面談＞ 担当教員と個別面談を行い、学習に関する問題解決を図る。課題図書を選択し、グループ編成をする。
10	テーマ：課題解決学習Ⅰ 個々で課題をみつけ同じ方向性の仲間とグループ（少人数）編成を行い、発表までの計画を作成する。	10	テーマ：課題学習応用Ⅱ＜討議・レポート作成＞ 課題図書の要約を持ち寄り、グループで討議する。討議後に学びの内容をレポート作成の様式に沿って書く。
11	テーマ：課題解決学習Ⅱ（交流学習） 課題を解決するための計画立案を行い発表する。ゼミでディスカッションを行い、計画の修正をする。	11	テーマ：課題学習応用Ⅱ＜討議・レポート作成＞ テーマに沿って各グループ毎に討議する。2回分の討議内容をふまえレポートを作成する（2400字以上）。
12	テーマ：課題解決学習Ⅲ それぞれのグループの進行状況を報告し、課題解決に向けてグループ活動を続行する。	12	テーマ：実力テスト〔解剖生理学〕：全国レベルで自分の位置を知るとともに現在の学習状況を振り返る。今後主体的に学習に取り組むための方策を考える。
13	テーマ：課題解決学習Ⅳ ポスター・レジュメ作成上の注意を受け、作成に入る。発表のための役割を決め、準備を始める。	13	テーマ：交流学習-代表学生は1年生の課題学習に参加しアドバイスをを行う。他の学生は、模試の自己採点を行い、自らの学習方法を振り返り今後の対策を考える。
14	テーマ：課題解決学習Ⅴ ポスターセッション形式でプレゼンテーションを実践する。発表を聞き、質問する。	14	テーマ：個別面談 課題学習応用Ⅱのレポートと、模試の自己採点の結果を踏まえ、教員と共に今後の学習について考える。
15	テーマ：接遇 接遇の講義を受け、信頼される接遇について学ぶ。看護職として、他者から信頼される接遇を考える。	15	テーマ：基礎ゼミⅠ・Ⅱのまとめ 1. 2年の基礎ゼミの活動を振り返り、今後の課題を明らかにする。ディスカッション後に自己評価表を記入。

ド、ポストイット、ラベルなどを用いて小集団学習において学習者のコミットメント能力を高めるための教育技法である。大学生活に対する思いをカードに表現し、発表したり、お互いの考えを模造紙に図解化するなどの作業を通し、「話す」、「聴く」、「書く」、「考える」の大学で学ぶための基本的リテラシーを習得していく。3回目のゼミでは上級生との交流を持ち、5回目のゼミは、担当教員との個別面談の時間を設けた。学生はゼミでの活動を契機に同級生、上級生、教員とネットワークの拡大を図っていく。

## (2) 基礎ゼミⅠ (6～9回)

6～9回目は、大学における学習スキルとしてレポート作成に関連するスキルの習得を目指した。レポート作成の講義前には文献検索ができるように図書館ガイダンスの機会を設け、その後に実際のレポート作成に取り組む。レポートは看護早期体験実習後であり、テーマは「あなたが考える看護」である。自己の体験とナイチンゲールの『看護覚え書』を照らし合わせ1200～1600字でレポートを作成する。レポート提出後は担当教員が個別に指導を行う。レポート作成をとおした学習スキル習得だけでなく、自己の看護観形成にも役立つものである。

## (3) 基礎ゼミⅠ (10～14回)

3～4人の小グループを結成し、看護の4原則(人間、環境、健康、看護)の中からテーマをみつけ、課題解決学習に取り組む。基礎的な研究的思考の育成を意図し、レジュメ作成とポスター発表によるプレゼンテーションを行う。

## (4) 基礎ゼミⅡ (1～9回)

基礎ゼミⅠの課題解決学習の応用編として再度、課題解決学習に取り組む。より能動的な学習スタイルとPDCAサイクルの定着を目指す。基本的な方法は1年次と同様であるが、基礎ゼミⅡではポートフォリオを取り入れ、発表はパワーポイントを作成し口頭発表を行うことにした。経過の指導にあたりポートフォリオを持参させ、研究のプロセスがわかりやすいようにし、思考の整理を促した。発表レジュメはA3用紙にまとめさせ内容の充実を図った。

## (5) 基礎ゼミⅡ (10、11、13回)

看護や医療にこだわらず、教員および学生が推薦する本のリストを作成し、その中から課題図書が学生が

決定し小グループをつくった。内容についてディスカッション後に800字のレポート作成、更にディスカッション後に2400字以上のレポート作成を課し、学びのリテラシー(読む・話す・聴く・書く・考える)の習熟を目指した。

## (6) 基礎ゼミⅡ (12回)

業者が実施する解剖生理のテストを受け、これまでの学習方法について振り返りを行う機会とする。

## (7) リメディアル授業

基礎ゼミのプログラムに入れていないが、計算力に関する補講授業を課外の時間に実施した。これは日常の授業や講義内容の理解を支える基礎計算力の確立と、看護師・保健師国家試験問題が解ける程度の基礎計算力の確立のために行うものである。同一法人の中学・高校の数学教員に協力を要請し、問題の作成と補講授業を依頼した。補講授業は単に計算スキルを復習するようなものではなく、数学の苦手意識を払拭すべく、「スキーマ理論」と「PISA型読解力」をもとに構成されたものである。

## Ⅲ. 結果

基礎ゼミⅠ・Ⅱ終了後の学生の自己評価を表2、表3、表4に示す。自己評価は4段階で評定している。

### 1) 人間関係の構築

基礎ゼミでは大学生活への導入プログラムとして、カードメソッドの手法を用いたラベルワーク演習や上級生との交流、教員との面談など人との交流を繰り返した。これら一連のプログラムについて学生に有益性を尋ねた結果を表2に示す。〈役に立った〉、〈まあ役に立った〉を併せると、大学の理解には91.3% (84人)の学生が役に立ったと答えている。ゼミメンバーとの交流については、94.6% (87人)、上級生との交流は78.3% (72人)、教員との交流は92.4% (85人)が役に立ったと答えている。4段階評定の平均で見ると同級生との交流が3.60で最も高く、自由記述においても友人を作るきっかけになりゼミがあってよかったという感想が多数見られた。先輩との交流が今も続いている、先生との距離が近くて相談しやすいなど肯定的な意見を述べている。「話をすることで不安が解消し安心した」という意見も多数みられた。

## 2) 学習スキルの獲得

大学での学びに必要な学習スキルの獲得ができたかどうかの自己評価の結果を表3に示す。4段階評定の平均からみると、「パソコンでの資料作成」が3.26、「図書館利用や文献検索法」が3.24、「インターネットの情報収集力」が3.23で獲得度が高い。いずれもパソコ

ンを使う操作であり、技術面のスキルである。逆に獲得度が低いのは「論理的構成力」2.68、「意見と事実を分けて書く力」2.69、「批判的思考力」2.72、「形式的レポート作成」2.72と続き、論理的技能項目といわれるものである。

表2. 基礎ゼミの導入プログラムの有益性 N=92

	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)	平均	標準偏差
大学の理解	36.96	54.35	7.61	1.09	3.27	0.65
同級生との交流	65.22	29.35	5.43	0.00	3.60	0.59
上級生との交流	48.91	29.35	18.48	3.26	3.24	0.87
教員との交流	40.22	52.17	7.61	0.00	3.33	0.61

4：役に立った、3：まあ役に立った、2：あまり役に立たなかった、1：役に立たなかった

表3. 学習スキル獲得の自己評価 (n=92)

	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)	平均	標準偏差
図書館利用法・文献検索	36.23	53.62	7.97	2.17	3.24	0.69
重要ポイントをまとめる力	9.78	55.43	34.78	0.00	2.75	0.62
意見と事実を分けて書く力	7.69	53.85	38.46	0.00	2.69	0.61
形式的レポート作成	9.78	53.26	35.87	1.09	2.72	0.65
インターネット情報収集力	25.00	72.83	2.17	0.00	3.23	0.47
ポートフォリオ活用	9.78	53.26	35.87	1.09	2.72	0.65
文献・資料の読解力	2.80	60.75	17.76	1.87	2.78	0.54
パソコンでの資料作成	34.07	58.24	7.69	0.00	3.26	0.59
問題発見力	23.91	55.43	15.22	5.43	2.98	0.78
課題解決力	14.13	70.65	14.13	1.09	2.98	0.57
プレゼンテーション技能	17.09	70.91	10.90	1.10	3.04	0.57
批判的思考力	6.52	58.70	34.78	0.00	2.72	0.58
論理的構成力	5.43	58.70	34.78	1.09	2.68	0.59
主張できる力	8.70	69.57	20.65	1.09	2.86	0.57
粘り強く取り組む力	15.38	63.74	19.78	1.10	2.93	0.63

4：身についた、3：だいたい身についた、2：あまり身につけていない、1：身につけていない

表4. 受講による知識・技能獲得の自己評価 (n=92)

	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)	平均	標準偏差
大学生であるという自覚	31.52	61.96	5.43	1.09	3.24	0.60
大学生活における目的目標の設定	18.48	61.96	16.30	3.26	2.96	0.69
多様なものの見方	14.13	71.74	14.13	0.00	3.00	0.53
社会問題への関心	13.04	65.22	20.65	1.09	2.90	0.61
探究心	15.22	45.65	35.87	3.26	2.73	0.76
批判的精神をもつ	4.35	61.96	32.61	1.09	2.70	0.57
自分の意見をはっきり主張する	19.57	55.43	23.91	1.09	2.93	0.69
共感性	29.35	64.13	6.52	0.00	3.23	0.56
協調性	33.70	54.35	10.87	1.09	3.21	0.67
リーダーシップ	9.78	28.26	55.43	6.52	2.41	0.76
口頭によるコミュニケーション	15.22	61.96	22.83	0.00	2.92	0.62
文章によるコミュニケーション	5.43	59.78	31.52	3.26	2.67	0.63
時間を管理する	10.87	54.35	31.52	3.26	2.73	0.70
集中力	10.87	59.78	26.09	3.26	2.78	0.68
自尊感情	5.43	66.30	26.09	2.17	2.75	0.59
看護職への動議づけ	16.30	54.35	25.00	4.35	2.83	0.75
愛校精神	7.61	45.65	39.13	7.61	2.53	0.75

4：身についた、3：だいたい身についた、2：あまり身につけていない、1：身につけていない

### 3) 受講による知識・技能の獲得

基礎ゼミを受講することにより獲得する力を表4に示す。「大学生であるという自覚をもつ」3.24、「共感性をもつ」3.23、「協調性をもつ」3.21、「多様なものの見方」3.00、「大学生活における目的目標の設定」2.96の順で自己評価が高い。逆に「リーダーシップ」2.41、「愛校精神」2.53は自己評価が低い。

### 4) 接遇

接遇の講義を受け、日常生活に活用できているかについて、「できた」と「だいたいできた」を併せると69.2%の学生ができていますと答えた。30%の学生は接遇の講義は役に立っていないということである。活用できている内容は複数回答で、挨拶が68件、ことばづかい45件、服装3件であった。

### 5) リメディアル教育

看護学科に入学してくる学生は理数系科目が苦手である。補講授業の有益性について、「役に立った」、「まあ役に立った」を併せると61.1%の学生が役に立ったと答えたが、38.9%の学生は役に立たなかったと答えた。補講をしてほしい科目は複数回答で、生物65件、数学44件、化学11件、国語5件、物理1件という結果であった。

### 6) 模擬試験

模擬試験の結果を振り返ることが今後の学習改善に役に立ったかの問いでは93.5%の学生が役に立ったと答えた。

## IV. 考察

初年次教育は、高校から大学の接続が円滑に進むためのカリキュラムであり、川嶋<sup>14)</sup>によると、「高校から大学への円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるためのものであり、そのために主に大学新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」と定義している。ここでいう学生の成功とは、大学進学によって学生が目指している教育上の目標（大学卒や大学院進学）、また個人的な目標（就職など）の実現に向けて順調に進んでいることを指している。初年次教育は米国において1970年代から導入され、中退を防ぎ大学教育を成功に導く過程で効果的であると高い評価を

受けている。日本においては、2000年代に入って多くの大学が導入を始め、2007年の国立教育政策研究所が行った調査では初年次教育の普及率は97%になっている<sup>15)</sup>。

初年次教育の内容は、①スタディ・スキル系（レポートの書き方、図書館の利用法、プレゼンテーション等）、②スチューデント・スキル系（学生生活における時間管理や学習習慣、健康、社会生活等）、③オリエンテーションやガイダンス、④専門教育への導入、⑤教養ゼミや総合演習など、学びの導入を目的とするもの、⑥情報リテラシー、⑦自校教育、⑧キャリアデザインの8つの領域に分けられる。実際には8領域のいずれかあるいは複数を組み合わせた内容で初年次教育を展開しているのが大学の実態といわれている。リメディアル教育は特定の教科の補習という意味であるため初年次教育とは異なるという認識が進んでいる。本看護学科においては正規のカリキュラムには入っていないが将来のキャリアに必要なものであることからリメディアル教育を課外の時間に取り入れている。

初年次・二年次教育として2年間のプログラムを実施した結果から、大学環境への移行と基礎ゼミのプログラムについて考察を加える。

### 1) 大学環境へのスムーズな移行

大学へのスムーズな移行について、学問に関わるところは言うまでもなく重要であるが、まずは学生が大学の環境に早期に適応することが重大課題である。濱名<sup>16)</sup>によれば、早い学年で大学生活に適応する方が適応の持続性があるという。2年次で適応した学生より1年次の早い段階で適応した学生の方が大学生活への適応度が高く、また適応を持続させることにより、学生生活にポジティブな影響を与える。学習面での適応と人間関係の適応の相関が高いというのである。大学における人間関係を早期に形成していくことは、大学生活を成功に導くために重要なことである。具体的には大学における自分の居場所づくりである。基礎ゼミにおいて関わりの場を提供し、学生の参画を促していくことが必要である。

また、大学生活を成功させるためには、大学環境への適応と学習への適応が不可欠である。周知の通り、大学での学び方は高等学校での学習スタイルとは異なるため、学習スタイルの転換が必要である。受動的な学習スタイルから能動的な学習スタイルへの転換には、アクティブ・ラーニングといわれる学習方法が有効である。アクティブ・ラーニングとは、知識を一

方的に伝達する講義方式ではなく、課題解決型学習、PBL (Problem-Based Learning / Project-Based Learning)、ディスカッション、プレゼンテーションなど学生の能動的な学習を取り入れた授業の総称である<sup>17)</sup>。学びの転換において、リーディングやライティングといった基礎基本を修得することは必要であるがそれが使えるようになる能力（コンピテンシー）が求められる。学生が能動的に活動することによる成果として、満足感や達成感は次への意欲につながるのである。したがって学習スタイルの転換には、大学で学ぶための学習スキルの獲得とそれが応用できる力を養うことが目的である。

さらに看護職を目指す学生には、医療の高度化や専門化により高い知識・技術、技能を持つことが求められている。患者に安全な医療・看護を提供するためには、高度な長期にわたる学びが必要になってくる。文科省答申ならびに、大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会の報告においても生涯学習という概念が組み込まれている。生涯学習はその人の生きる姿勢であるので、誰に言われることもなく自ずと学びを得ようとする。学習スタイルの転換では学びの意義が実感できるような働きかけが必要である。これは単に楽しいとか面白いというものではなく、満足感や達成感が得られ自己肯定感につながるものが望ましい。ユニバーサル段階の学生は座学が苦手な人が多いので、アクティブ・ラーニングを繰り返すことで看護職に必要なクリティカルシンキングやコミュニケーション力が身につくことが期待できる。学びの姿勢が身につくことでキャリア教育にも繋がっていく。

## 2) 基礎ゼミのプログラムについて

カリキュラムの作成にあたっては、建学の理念、各学部各学科の主軸となる学問、入学してくる学生の類型や目指す学生像、就職先などかえりみながら作成していく。中村<sup>18)</sup>はカリキュラム作成にあたって最重要項目は、入学する学生の学生類型とそれに連結した大学類型を誤らない点であるとし、M.トロウの3類型をもとに大学がどのタイプに属するかでカリキュラムの構成や内容に説明を加えている。大学・学生類型をA・B・C、3つの類型に分けて説明すると、A類型大学は研究型大学で学生の思考はエリート型であり、初年次教育の内容は、クリティカルシンキング、多様なレトリック、アイデアの拡散と収束、コミュニケーション・スキルなどにより構成され、カリキュラム外のサポートは必要とする学生だけでよいという。

B類型大学は、高度教育型大学で、中程度の偏差値をもち、高校での学習が一度身についた学生、いわゆるマス型の思考をもつ。この類型はオリエンテーションが重要で当該大学の教育方針を理解させることが重要なのだという。導入教育が欠かせず、内容的にはリサーチスキルの基礎、アイデアの拡散と収束、情報スキル、コミュニケーション・スキルが考えられ、カリキュラム以外のサポートには学習支援の諸事業がある。C類型大学は、普遍教育型大学であり、学生の多くは皆が大学に行くから自分も行こうというユニバーサルアクセス型の思考をもつ。この類型でのオリエンテーションの目標は学習の動機づけ、修学不安の解消、教職員との触れ合い、きめ細かい学習ステップの提示、生活習慣の向上が初年次教育の内容となるという。これら3類型のどの類型にあてはまる大学であるのか自覚してカリキュラムを的確に作成し、学生支援のポイントを誤らないことが肝要だという。

本学看護学科の学生はA類型学生はいるもののB類型がほとんどであり、一部C類型に入る学生も存在すると思われる。そのようにみたととき今回の基礎ゼミのプログラムは適切であったのか、中村<sup>18)</sup>の理論から検証してみる。B類型大学では、まずオリエンテーションが大事であるという。中村は新入学生全員を対象としたオリエンテーションを指していると思われるが、ここでは基礎ゼミのオリエンテーションとして考えてみる。高等教育の進学率が50%を超える中、保護者のほとんどが入学式に参列している。入学式後には毎年、基礎ゼミの内容とアドバイザー制度について説明を行い、短時間の面談を行うがこのことは保護者の安心につながっているようである。大学側としても、配慮をするべき学生の情報が保護者から確実に入ることで学生への支援の準備ができる。学生に対してのオリエンテーションはゼミ単位が基本になるが、少人数であることが教員と学生、学生と学生のメンバー同士の距離感が近くなり、人間関係を良好に形成することができるようだ。1年次の1～4回の導入プログラムは、大学生活に向けての学習面、生活面のオリエンテーションの内容を含んでおり、学生が困ったときにすぐに支援を受けられる体制が整えられている。B類型大学では、必要時、大学の支援が受けられるようにオリエンテーションの充実が肝要であり、本看護学科は有効に活用できているといえる。

つぎにカリキュラムの内容について検討する。B類型大学においては、リサーチスキルの基礎、アイデアの拡散と収束、情報スキル、コミュニケーション・ス

キルが適切であるとされるが、基礎ゼミⅠ・Ⅱの展開ではすべて網羅していた。学力と看護の人材育成を併せて考えると、主体的に行動できる人をイメージし、アクティブ・ラーニングのプランを繰り返し実施することにした。アクティブ・ラーニングの質を高めるためには、知識を基礎におかなければ真の問題解決力や課題解決力、論理的思考力の効果は期待できないともいわれるが、初年次教育の対象学生によって考え方も柔軟にする必要があると考える。座学の習慣がない学生に知識を学ばせようとしても理解が困難なことがよくある。この場合、基礎的なレクチャーの上にアクティブ・ラーニングを展開すると理解が進むことがある。学生は関心を示し始め、わからないところがわかるようになる。解決のために何が足りないのか、次に何をすべきなのか考え、実行に移していく。PDCAサイクルを実践することで継続的な改善を目指していくのである。もちろん学習習慣が身につけていない学生にPlan（計画）、Do（実行）、Check（評価）、Act（改善）が簡単に身につくわけではない。サイクルを繰り返しながら学生が向上していけるような教員の支援が必要である。2年間の基礎ゼミの展開の中にアクティブ・ラーニングを活用し、PDCAサイクルを根付かせることが学びの転換になり、キャリア教育にも通じると考える。

基礎ゼミでは、レポート作成→ポスター発表→パワーポイントを使った口頭発表→レポート作成を実施し、その間、幾度もディスカッションは繰り返されているはずである。2年間の間の反復で確実にその質や内容は向上している。自己評価の点数には現れていないが、下級生に発表の指導をする時などは批判的思考やロジカルな思考は発揮されていたのである。自己評価の点数からは、批判的思考、論理的構成力、事実と意見を分けて書く力等レポートを書くために必要な論理的思考能力はあまり高くなっていない。山田は短期に身につく能力と長期にかかる能力があることを示し、長期にかかる能力について4年間という大学終了までの中で時間をかけて育成するような連続性の構築を示唆している<sup>19)</sup>。本学看護学科では3年生は実習がほとんどであるが、4年生は看護総合演習・実習で再度ゼミが結成される。4年次はこれまでの知識・技能を統合する段階になるのでその時期を見据えたカリキュラムの連続性を志向していくことが必要である。

基礎ゼミを受講した学生からは、人間関係の構築のために基礎ゼミがあってよかった、知らず知らずのうちに能力が身につけていたという意見が多い。しかし、

他領域との課題が重なり苦痛であったという意見も聞かれた。基礎ゼミ担当教員間の連携は十分できていたが、他の領域とは接触することがなかった。学生にとって効果的な学習の進め方を提供するために他領域との教員間の連携も必要である。

### 3) アドバイザー制度について

最後に基礎ゼミにおけるアドバイザー制度の有効性について述べる。初年次教育は早期に大学環境と学習環境に適応することが課題である。居場所の確保ができない学生にとって、それは一つの危機と考えてよい。ようやく適応し、居場所の確保ができたとしてもそれが継続していくことができるかはまた別の問題である。学業に関わる問題や、大学内における人間関係のトラブル、また青年期という発達段階は活動の拡大に伴い精神面の危機に襲われることも珍しいことではない。学生ひとりひとりに関心を向けられるアドバイザー制度はその意味で有効と考える。そして、基礎ゼミという正規のカリキュラムに組み入れることで学生に対する教員自身の関心や責任感が増し、学生支援が充実してくると考える。適度な距離感が学生に安心を与え、大学生活全般に功を奏していく。基礎ゼミにおけるアドバイザー制度は初年次教育を成功させるための柱となっている。

## V. おわりに

2年間の展開からいえることはカリキュラムの連続性という考えが必要ということである。初年次教育を1年次のみにするにしろ、2年次まで続けるにしろ、大学教育は4年間あり、卒業時にどのような力が身についたのか、アウトカムが重要である。看護系大学においては看護の専門への導入教育という要素は看過できず、初年次教育の内容をいつどの教科に取り入れるかなど教科の連携が必要になってくる。

### 【文献】

- 1) 濱名篤：初年次教育の最先端. 比治山高等教育研究. 2: 143-191, 2009
- 2) 文部科学省：学士課程教育の構築に向けて（答申）  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/fieldfile/2008/12/26/1217067\\_001](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/fieldfile/2008/12/26/1217067_001).



pdf

- 3) 文部科学省：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm)
- 4) 濱名篤, 川嶋太津夫編：初年次教育－歴史・理論・実践と世界の動向. 第2版. 丸善. 東京, 2009
- 5) 山田礼子：一年次（導入）教育の日米比較. 初版. 東信堂. 東京, 2005
- 6) 河合塾編：初年次教育でなぜ学生は成長するのか－全国大学調査からみえてきたこと－. 初版. 東信堂. 東京, 2010
- 7) 大城凌子, 進藤美樹, 永田美和子他：看護大学における初年次教育－自己教育力育成の試みとしての教養演習. 看護教育. 50 (5) : 396-401, 2009
- 8) 豊嶋三枝子, 小口多美子：看護系大学における初年次教育の実態－教員への質問紙調査から－. 日本看護学会論文集（看護教育）. 40 : 140-142, 2009
- 9) 進藤美樹, 大城凌子, 金城祥教：フレッシュマンセミナーの体験を通じた学生の学び－学生へのインタビューから－. 沖縄県看護研究学会集録. 24 : 88-91, 2009
- 10) 岡崎美智子, 下條三和, 他11名：初年次教育における「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」のあり方. 国際医療福祉大学福岡リハビリテーション学部看護学科紀要. 6 : 49-59, 2010
- 11) 金城やす子, 鈴木啓子, 大城凌子：批判的思考能力を育成するための教養演習における学生の学び－学習プロセスの分析を通して. 日本看護学会論文集（看護教育）. 40 : 146-148, 2009
- 12) 鈴木啓子, 金城やす子, 大城凌子：批判的思考能力を育成するための教養演習を担当した看護教員の教育上の課題と工夫－教員へのグループフォーカスインタビューを試みて－. 日本看護学会論文集（看護教育）. 40 : 143-145, 2009
- 13) 金城祥教：看護教育に於けるコミットメント能力の育成に関する研究ノート－カード・メソッドの教育効果－. 名桜大学紀要. 13 : 95-102, 2007
- 14) 前掲4) pp. 1-12.
- 15) 山田礼子：初年次教育とは何か「生徒」から「学生」にするための方策. 看護教育. 50 (5) : 376-381, 2009
- 16) 濱名篤：日本における初年次教育の位置づけと効果. [souken.shingakunet.com/college\\_m/2007\\_RCM145\\_04.pdf](http://souken.shingakunet.com/college_m/2007_RCM145_04.pdf)
- 17) 溝上慎一：教育改革ingアクティブ・ラーニング. [http://www.keinet.ne.jp/doc/gl/10/11/kaikaku\\_1011.pdf](http://www.keinet.ne.jp/doc/gl/10/11/kaikaku_1011.pdf)
- 18) 中村博幸：ゼミを中心としたカリキュラムの連続性. 嘉悦大学研究論集. 51 (3) : 1-13, 2009
- 19) 前掲15)

## Outcomes and Issues from the First and Second Year Experience Programs in the Department of Nursing

Yukiko Maeda\*, Aiko Karasaki\*\*, Kanako Ishida\*\*\*, Yoshinobu Asano\*\*\*\*,  
Akiko Fukahara\*\*, Masako Ono\*\*, Mikiyo Ishii\*\*, Katsue Takahashi\*,  
Mika Kage\*\*\*, Satoko Kashima\*\*\*, Yuko Meno\*\*\*\*, Naoko Ito\*\*\*\*

### <Abstract>

Focusing on the ‘basic learning exercise seminars’ provided as part of the First and Second Year Experience programs in the Department of Nursing, this study seeks to present an overview of the activities and learning concepts of the seminars, and to elucidate the outcomes and issues to be addressed in the future.

In self-assessments of their learning skills, students gave themselves relatively high evaluations for technical skill items related to using computers and the Internet, and low evaluations for logical skill items such as *logical construction* and *critical thinking*. In their self-assessments of the knowledge and skills they acquired through the seminars, the students gave themselves high evaluations for the items of *empathy* and *cooperativeness* and low evaluations for the items of *leadership* and *school spirit*. Their comments on the two-year program indicated that, while there were positive opinions that the program helped them improve the learning skills needed for studying at university and in building human relationships on campus, there were negative opinions that working on assignments in the basic learning exercise seminars on top of assignments for the specialized subjects was burdensome.

For the future, lesson planning should be examined with consideration of the linkage between the basic learning exercise seminars and specialized subjects, while utilizing the advantages of the current advisor system.

Keywords: First-Year Experience, learning skills, advisor system, nursing program in universities

---

\* Instructor in the Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University  
\*\* Associate Professor in the Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University  
\*\*\* Assistant Professor in the Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University  
\*\*\*\* Professor in the Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University